
『怖いものの研究部』 ♪

離宮 愛琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『怖いもの研究部』
♪

【Nコード】

N7741B

【作者名】

離宮 愛琉

【あらすじ】

この物語の主人公、緒方くんは「怖いもの研究部」の部長でした。なかなか可愛い副部長の明音ちゃんと世の中の怖いものに挑戦します！さあ、今日はどんな奇怪なモノたちに挑んでいくのでしょうか？

take 1 花子さんの鬼っぴん♪

こんばんわ。

ボクの名前は緒方恭介。おがたきようすけ 高1さ。

只今、24時を回ったボクの学校の教室中。…そろそろだ。

そうそう、誤解を招かないように先に言っておくけど、ボクは決して変態なんかじゃないよ。これはあくまで部活動なのさ！別に好き好んで真夜中の女子トイレなんかに行ったりするような…何？

…そんな目でボクをみるなあ！

分かったよ…ちゃんと説明するから、その目だけはやめて…？

って言っても、ボクの部活動の説明するのはちよっとむずかしい。だから、今回の活動を見てもらおうと思う。

という訳でボクはこれから女子トイレに行く。……………ついた。

さて、ここまできたらこれからどうするのか、分かっているだろう？

「はあくなさあ〜ん！！！」

もちろん。これだ！

「はあい…」

よし！来たあ！！

「何して遊ぶ？」

「そうだなあ……………」

考えるフリをしながら手首に付いているボタンを押す。

あとは、あいつに任せるだけだ！

「…………誰かが私を呼んでる…」

ふっ！引っ掛かったな！

「ちよっと思惑どおりね。それまでに考えていて…」

よし！思惑どおり！

〜30秒後〜

「はあくなさあ〜ん！！！！」

「はあい…」

花子さん、ちょっと疲れてるな？

「花子さん！鬼ごっこしよ！」

「え！……いいわよ」

そういえば、うちの学校の花子さんは「遊び」と題した「殺人」をするんだ。まあ、もう30年前の話だけだね。

「じゃあ、私が鬼ね。分かっているとと思うけど、捕まったら……」

「ボクは死ぬ。でしょ？」

「……い……ち……に……い……い……」

さあ、そろそろだ！もう一度、ボタンを！

ポチッ

「……また、呼んでるわ……」

　　↓10秒後↓

「はあ……なこさあ……ん……！！！」

「は……あ……い……い……」

「もう一回、最初っからね！」

「分ったわ……私が鬼ね……い……ち……に……い……い……」

ポチッ

「まただわ………行ってくるわ……」

　　↓10秒後↓

「はあ……なこさあ……ん……！！！」

「はあ……い……い……」

「最初っからね」

「……分かったわよ………はあ……い……ち……に……い……い……」

ポチッ

「もお！今日は勘弁してあげる！だから、帰って！」

「そう言われてもなあ……こっちは勘弁しないもん」

「………分かったわ……もう、殺しはやらない。それでいい？は

あ……“あの”噂は本当だったのね……」

「ん？噂？」

「つとに。あんたもとんでもない部活を作ったものね！こっちはえらい迷惑よ！さあ、もう帰りなさいよ！連れの女の子と一緒にね！私はもう潰したんだから、もう用はないでしょ！？二度と来ないですよ！？」

そう言つて、花子さんは消えた。

『状況終了！もう学校から出ていいよ』

持っていた携帯で今回の協力者（部員）に連絡する。

『りよーかい。』

今回の研究。「花子さんを『遊び』で極限まで疲れさせたらどうなるか？」

今回の作戦を分かりやすく説明すると…この小型無線（手首についていたやつ）で、もう一人の部員に合図を送り、順番に、死なないうつてか殺されない程度に「鬼ごっこ」をしていった訳だ！

2対1なんだから、疲れるのは当たり前だよね！（笑）

まあ、ボクらの活動はこんなものだ。分かって頂けたかな？

「分かるわけないでしょ。」

…心の中を読むなよ…いつもながら怖い。

「あつそ。あ！はじめまして…私は『怖いもの研究部』の副部長、やしまあかね矢島明音です♪よろしく」

「よろしく～ぢやなくて！あ～もう！いいや！そう、ボクが部長をやっているのは『怖いもの研究部』！だからボクは変態じゃないの！…何でまだそんな目で…」

「まあ、あんたが『変態』って事は間違つてないけどね。」

うるさいなあ…靈感ありあり変態少女！

「聞こえてるよ？いつまで経っても成長しないねえ…」

「だ～か～ら～！心の中を読むなって！」

「その『靈感』のお陰でこうやって活動できるんでしょ？ありがとう
く思いなさいよ。」

…まあ、その通りだけど……

「でわそうゆうことで、我ら、泣く子も黙る『怖いもの研究部』！
毎週火曜に活動しております♪来週は……なんか、その前に「メリ
ーさん」が現れそう…まだいつ来るかは未定！次回の活動をお楽し
みに〜！」

勝手に終わらせるなよ！

「またね〜！」

take2 メリーさんの「お人形っこ」

「……………寒っ！」

ボクは今、何故か携帯片手に都内で一番高いビルの屋上で一人つつ立っている。

ブウン…ブウン…

いきなり携帯が震えだした。ってか着信だ。

「はい？もしもし？」

かつたるそうに電話に出る。

「もしもし？私、メリー。今、あなたのいるビルの屋上に向かっているエレベーターの中なの。」

……………。

「だからなんだ！？うつさいんだよさつきから！こっちに来てんだろ！？分かったっていつ……………」

ツーツーツー

このやり取り、これで何回目だろうか…。怖いっていうか、むしろ腹が立ってきた。

「そ。ご愁傷様！頑張れ、あと十分くらいでかたが付く！」

「明音さん…むしろ君の方がボクにとっては脅威な、ん…でえ！？」
おいおいおいおい……

「来たわね、メリーちゃん」

何でそんなに嬉しそうなんだよ！？包丁飛んで来たんだぞ！？

「スリルがあって楽しいじゃんwってか…」

そう言っ明音はボクを指差した。

「…何！？」

「アブナイヨ」

ガツンッ×7（くらい）

「っわぶね……………」

どうにか連射された包丁をかわした。

「ふむ…ターゲット以外には手を出さないのね。いい子ねえwメリーちゃん！」

ど・こ・が！明音じゃなくてボクがターゲットってトコからしていい子じゃない！

「あそ。で、メリーちゃん来たんだから早いとこ研究に入りなさいよ〜！」

そうだった…今回の研究。

『メリーさんと「お人形ごっこ」をしてみよう！』だ。今になって思っただけ…自殺行為だな…

「はあ…仕方ないなあ…」

ボクはノロノロと敷いてあったブルーシートの上に移動した。

「明。恥ずかしいから早くしてくれない？」

「分ったわよ。…つしょつと！」

明はいきなり空を切った。

ボクから見ると、ただのアホなのだが…

「…聞こえてるって…放すわよ？」

いいいい！！ごめんなさい！！

えつと！明さんはボクらには見るこのできないメリーさんを掴んでくれたんです！

「つとに！いちいち余計なのよ！ほら！やるわよ！？」

…ボクは用意されてあった人形を取り出した。

なんかさあ…ボクって皆に誤解されるような事ばかりしてない？

「大丈夫よ！あんたは真正銘の変態なんだから！」

さいで。

〳〵二十分後〳〵

ブウンブウン…

ボクの携帯が鳴りだした。

「はい？」

「…私よ。メリーよ…お願い、もうやめて？」

「いいけどぉ…」

「分ってるわよ。もうやめます！誓います！」

「了解！明音！降参だつて！もう放してあげてもいいっぽいわ？」

「そう？じゃあ。」

明音は掌を広げた。

「…ふう…あんたらは…花子が言っていた通りね…陰陽師よいも厄介だわ…」

「そりゃ、どうも。」

「じゃあね。もう切るわよ。」

ブツッ！ツーツーッ…

「っあゝ！死ななくて良かったあゝ！！！」

「…そうね、でも、それどころじゃなさそうよ？」

「…ん？」

えゝ…緊急連絡。

なんか…えっと…そのお…

「そろそろウチの学校の裏庭の元井戸から例のあの人登場！ほら！作戦立てないと死ぬわよ！」

やべえ…死期が近づいてる音がする……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741b/>

『怖いもの研究部』♪

2010年10月28日06時48分発行